

心ある生活を!

さちあ

創刊号

発行 黄檗宗青年僧の会「大阪の集い」の有志
 教化布教紙研究会事務局
 霊龜山九島禪院
 〒550 大阪市西区本田3丁目4-18
 TEL 06-582-5772

ガンの告知

— 信仰心と生きがい —

先日の新聞記事によると、日本癌学会で「ガンを告知する方が患者にとって良い」とする研究内容を発表して注目を集めた。

それによると、末期ガンの場合、ガンを告知されていた二十人と告知されていなかった二十二人について死の直前の心理状態を調べたところ、告知された患者の八十五％は特に精神状態に変化はなく、安定した状態で死を迎えた。しかし、告知されなかった患者の五十九％は不安や興奮状態を示した。

一方、これとは別にガンが進行している状態の患者については告知された二十七人のうち十人は闘病しながら仕事を続け、六人の患者は死後に残す家族の生活設計についての準備までした。しかし、告知されなかった患者三十六人のうち大半の三十四人は、死ぬまで闘病生活に終始したという。

こうした結果から、ガンの告知は、ガンではないかという疑心から解放されることで患者の精神的負担を軽減させむしるガンの告知により、患者は死ぬまでに残された貴重な時間を有意義に過ごせることを実証している。

黒沢明監督の映画に「生きる」がある。主人公の志村喬が、雪の降る公園でブランコに乗りながら「命短し、恋せよ乙女」と歌いながら死んでいくシーンを強烈に覚えていた。定年間にガンを宣告され、残された日々を何か一つ「生きた」証しを得たいと、子供たちのために小公園作りを奔走する。それが完成した最後のシーンである。定年は会社勤めの人間の必ず行きつく先である。日本人にとって定年とは人生の終わりと宣言されるくらい重いものを持っている。会社のために滅私奉公で働き、まるで人生のすべてが仕事のように思い込んでい

る人が、定年を迎えると、たちまち生きがいをなくしてしまふ。主人公はそのうえガンで、短い命と宣言されてしまふ。打ちのめされた主人公は自暴自棄の生活を送るが、絶望のあとに一つの悟りを開く。これまでの五十五年の人生は何だったのか無に等しくはなかったのか。ガンを宣告されて命は区切られた。それならば、残された短い日々を今迄以上の密度で生きてみよう。残された日々を公園作りのために鬼神のごとく奔走する。そして、残された日々を真に「生きる」ことによって主人公は生きがいを見つけ得る。

この夏、ガン患者たちがガンと闘いながら、ヨーロッパのニューズが話題になったが彼らも、いわば「死の宣告」と



